

令和5年12月19日

八戸市議会
議長 小屋敷 孝 様

自民クラブ
長谷川 ひろゆき

視察実施報告書

下記の通り調査視察を実施したことから、以下のとおり報告いたします。

記

1. 視察日時 令和5年11月6日（月）～令和5年11月8日（水）
2. 視察場所 福井県敦賀市 東浦小中学校
福井県敦賀市 公設書店「ちえなみき」
3. 視察事項及び
調査結果概要 別紙の通り
4. 視察議員
 - ・長谷川 ひろゆき
 - ・岡田 英
 - ・藤川 優里
 - ・壬生 八十博
 - ・立花 敬之

以上 計5名

調査視察 報告書

1 視察地：福井県敦賀市

- 1-1 視察日時
- 1-2 対応者

2 調査・視察事項：東浦小中学校 小規模特認校制度について

- 2-1 視察目的
- 2-2 制度導入の経緯について
- 2-3 導入後の児童生徒および教員の反応や変化について
- 2-4 八戸市議団の質問に対する回答

3 調査・視察事項：公設書店「ちえなみき」について

- 3-1 視察目的
- 3-2 八戸ブックセンターとの違いと参考にしたポイントについて
- 3-3 集客の仕掛けやコーディネートについて
- 3-4 市民への浸透および自主事業やイベント等について
- 3-5 八戸市議団の質問に対する回答

4 視察所感

1 視察地：福井県敦賀市

1-1 視察日時

【東浦小中学校】 令和5年11月7日 9時30分～11時
【ちえなみき】 令和5年11月7日 13時30分～15時

1-2 対応者

【東浦小中学校】

敦賀市立東浦小中学校 校長 山岸 美穂 氏
敦賀市立東浦小学校 教頭 堀川 和宏 氏
敦賀市立東浦中学校 教頭 鈴木 成吉 氏
敦賀市教育委員会 学校教育課 指導主事 和多田 貴宇 氏

【ちえなみき】

敦賀市議会 議長 馬淵 清和 氏
敦賀市 都市整備部 部長 小川 明 氏
敦賀市 都市整備部 都市政策課 課長 酒谷 昌宏 氏
敦賀市 都市整備部 都市政策課 主査 佐藤 雅善 氏
丸善雄松堂株式会社 アカデミック・プロセス・ソリューション事業部
コミュニティデザイン営業部 荒川 祐太郎 氏

2 調査・視察事項：東浦小中学校 小規模特認校制度について

2-1 視察目的

現在の日本は、少子化が非常に大きな問題となっている。地方に行けば行くほどその影響は大きく、運営がままならない学校も増えている。こうした事情をふまえ、「小規模特認校」となる学校が全国的に見られるようになった。

小規模特認校とは、特定の学校について、通学区域に関係なく、当該市町村内のどこからでも就学を認める「特認校制度」を、小規模校で実施することである。少人数での教育の良さを生かした、きめ細やかな指導や特色ある教育が可能であるとされている。

この度、福井県敦賀市の東浦小中学校を知る機会があった。前身である東浦

小学校は、一時期は全校児童 500 名以上であったが、平成後期には 30 名程にまで児童数が減少した。近隣の学校も同様の状況であったことから、令和 2 年に小規模特認校制度を開始している。

八戸市では「特認校」や「小規模特認校」は実施されていないが、人口の減少による少子化が続いていることから、決して他人事とは言えないであろう。令和の時代に小規模特認校となった東浦小中学校の例を学ぶことは、これからの八戸市における学校のあり方を考える上で重要であると考えたことから、今回の視察に至ったものである。

2-2 制度導入の経緯について

小規模特認校制度は、1977 年に札幌市から始まった制度である。生徒数の減少で廃校の危機にあった、札幌市郊外の山間部へき地小規模校の存続を願う地域住民や学校関係者の要望に応えたものである。21 世紀に入ってからは、小規模校を存続させることを目的として全国に広がっていった。

東浦小中学校は敦賀市内から少し外れた場所に位置している。年々減少していく生徒数に頭を抱えていたことから、同制度を導入することを決めた。地域住民達との協議の結果、周辺 4 校と中学校を統廃合した「東浦小中学校」として、令和 3 年度に開校した。「できるだけ地元の学校に通わせたい」という、地域の方々の地元への愛着が、小規模特認校である東浦小中学校の誕生を後押しした。自然が豊かであり、広く目の届く教育環境が特徴であるが、根本の問題である過疎化への懸念は今なお続いている。

2-3 導入前後の児童生徒・保護者・教員の理解や反応について

制度を導入するか否かについて、大人たちの間では簡単にまとまらなかった。しかし、当時の PTA 会長のリーダーシップにより、制度を導入し、学校・保護者・地域がそれぞれ協力し合う方向で話がまとまった。

児童生徒の反応に関しては、大人たちと正反対であった。あっさり状況を受け入れていた事に、大人たちは「子どもの適応力の凄さ」を実感した。

小規模特認校である東浦小中学校は、一般的な学校とは異なる、独自の制度やカリキュラムが組まれている。主なものでは次の通りである。

- ・市内全域から入学できる。
- ・バス通学以外の生徒は、保護者の送り迎えが必須となる。
- ・入学を希望する場合、必ず体験入学を納得いくまで受けてもらう。

- ・編入学の場合は、市教委に相談する。その後は体験と見学を重ねた上で入学手続きを行う。
- ・学校は7：50から始まる。敦賀駅からバス通学をする生徒もいることから、時間を合わせて少し早めのスタートとしている。
- ・スクールバスはない。生徒は市内全体からきているため、市バスを使ったほうが効率よく通学できる。
- ・実技系の授業は、学年の枠を超えた複式授業で行っている。国数算理は単式授業で行っている。
- ・給食は自校で作っている。毎食、作り立てを食べられる。
- ・少人数を活かして、徹底した個別指導ができる。振り返り学習や先取り学習も可能である。
- ・タブレットも日常的に使用していて、ICTに強い。自宅に持ち帰りも出来る。
- ・体験学習の機会を多くとっている。花壇で季節の花を植えたり、大きなシャボン玉を作ったり、ゴムボートに乗ったりする。
- ・地域との連携、外部機関との連携も重視している。「東浦みかんプロジェクト」では、年間を通してみかんとふれあい、総合的学習のカリキュラムとして進めている。また、「阿曾相撲甚句」を伝統文化継承プロジェクトとしてみんなで取り組んでいる。
- ・サツマイモを栽培し、収穫後、地域の焼き芋名人と焼いて一緒に食べたりしている。
- ・子ども主体による活動の推進も行っている。「小学生企画全校かくれんぼ」や「全校水遊び」、「県内小規模校とのふれあい」などがある。

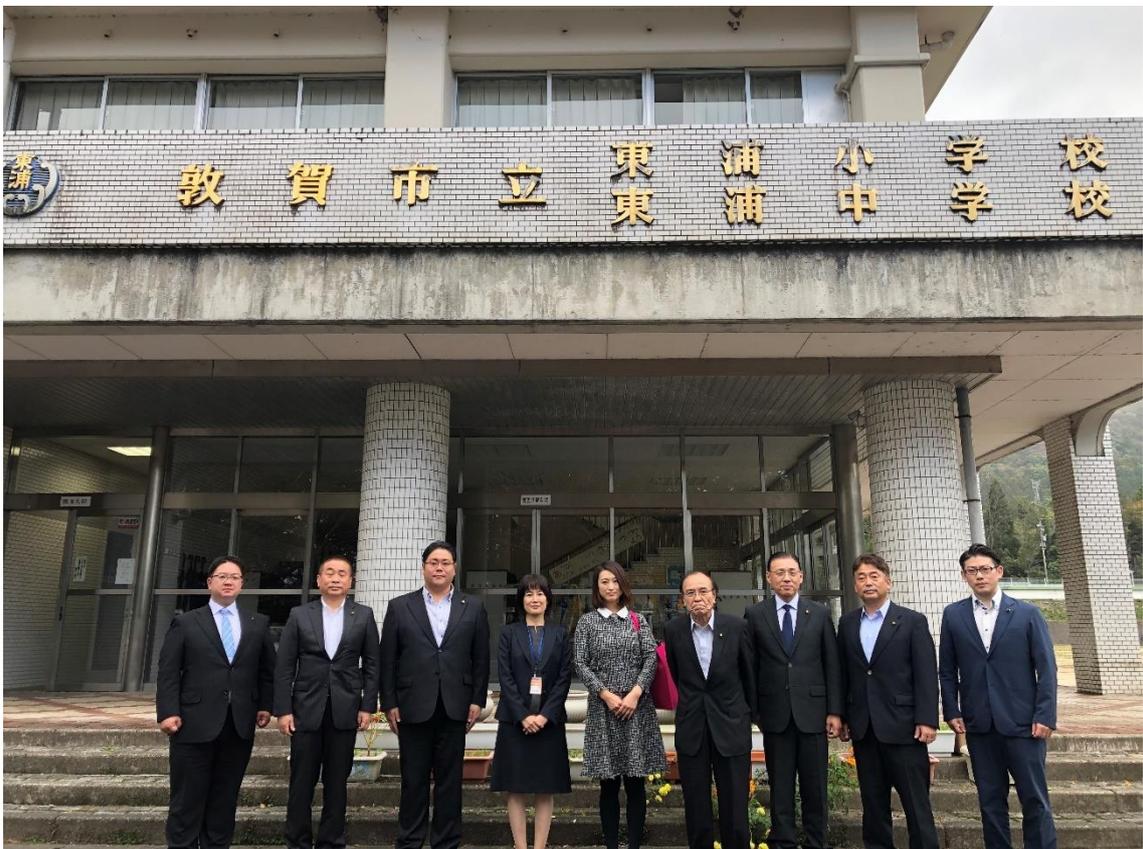
2-4 八戸市議団質問に対する回答

- Q. 教育委員会の面談があると伺ったが、どのようなものか。
- A. 学校教育課において、学校の説明の他に、保護者に対して学校への理解を深めてもらう説明を行っている。
- Q. 編入したい場合の体験は、生徒保護者によって回数は違うのか。
- A. 多い方も少ない方も様々だが、最低限一日体験を複数回やる。長い子は、夏休み明けから2か月位の体験をした子もいる。納得いくまで体験してもらおう。
- Q. 例えば、発達障害等の支援が必要とされる生徒も入れるのか。
- A. 入れる。面談や体験をしてもらい、本人が気に入れば編入可能である。
- Q. 公立なので教員の異動があると思うが、一般的な学校と比べると大変か。

- A. 大変。一斉指導から個別指導への切り替えに戸惑う教員も多い。
- Q. 進路指導についてはどうか。
- A. 普通にやっている。他校と同じである。生徒も自分の選ぶ道に進んでいる。
- Q. 特認校の教師として苦勞するところはあるか。
- A. 全ての生徒を細かく見ているので、色々見えてくる。保護者も要望が強い方々が多いので対応が大変。しかし、やりがいは大きい。
- Q. 教員や地域の反応はどうか。
- A. ここに来たことで、既成概念を崩す苦しみがあると思う。地域の方々は、バス待ちの停留所で、子どもを見る機会が増えたと喜んでいる。
- Q. 特認校になって子どもが増えた率よりも、減った率が大きいとある。普通なら廃校となるが、持続するための決まりはあるのか。
- A. 学校としてはプレッシャーを感じる。無くなるかもしれないが、そこは自分たちでは分からない。しかし、何とか児童生徒たちに入ってもらえるように頑張っている。学校経営の側からはそう思う。







3 調査・視察事項：公設書店「ちえなみき」について

3-1 視察目的

今回の視察先である、公設書店「ちえなみき」は、八戸ブックセンターを参考に建てられた。しかしながら、参考元となった八戸ブックセンターは、開館以来、専門性の高い書籍に特化した販売方針が一因となり業績不振が続いている。八戸市議会においてもその是非を問われることが多い同施設であるが、一方の「ちえなみき」は業績が非常に良いとのことである。

「市民と本を繋ぐ」ことを目的としている点ではどちらも同じであるが、なぜこれほどの違いが生じてしまったのだろうか。また、八戸ブックセンターが「ちえなみき」から学び、改善できるポイントはないのだろうか。八戸ブックセンターの負債軽減と、真に市民から求められる書店のあり方を学ぶべく、今回の視察に至った次第である。

3-2 八戸ブックセンターとの違いと参考にしたポイントについて

「ちえなみき」を設置するにあたり、担当者たちには「本は様々なことを繋ぐものであり、知の拠点であることから、コミュニティの拠点として本を介して人とのつながりを広げたい」という思いが強くあった。八戸ブックセンターの参考点としては、「前例のない公設書店をつくる」ということで、多くの前例のない点を打ち破ってきたことが参考になった。そして「ちえなみき」の独自性としては、「公設書店で視察受け入れをできるような体制を整えている」こと等があげられた。

3-3 集客の仕掛けやコーディネートについて

集客の仕掛けの1つに、カフェや販売所の導入がある。「ちえなみき」を建設するにあたり、「本とくつろげる場所」について、何度となく調査をした。そして「中道源蔵茶舗（お茶）」などの業者を選定した。ナカミチ茶店は有名なお店なので、その時点で宣伝効果はあった。

また、開業にあたり、市民との交流の場を設けた。敦賀で名前がよくあがる方々を読んで、地元に対する思いを伺った（敦賀未来会議）。市民の場所としての機能をきちんと持つために、月1回は集まって話をした。最終会議の際には40人ほどの人数が集まった。平均すると20名ほど集まっていた。メンバーには主婦や消防士など、様々な立場の方で構成されていた。

市民と対話をすることで、「何をしたいか、してほしいか」を直接聞くことが出来たため、オープン前からある程度の認知度はあった。

3-4 市民への浸透および自主事業やイベント等について

年間180本のイベントを行っている。月にすると15本ペースである。特徴としては、イベントをやるにあたり、有名な人を対象としていないことが挙げられる。これから新しいことをやりたい人に対し、「ちえなみき」を無料で貸し出している。

一例としては、クイズ好きな方への、クイズイベント場所の提供があげられる。イベントは好評で、その方は後にテレビ番組の「アタックチャンス 21」に出場した。

自主事業としては、外の芝生スペースも活用したイベントを実施した。常に本だけ、ということではなく、色々取り組んでいる。毛色の違うものにも取り組んでいる。学びは多様なので、どんな方にでも楽しんでもらえる施設を目指している。

3-5 八戸市議団の質問に対する回答

Q. 一日の本の売り上げはどれ位か。

A. 直近のデータでいうと、月150万円位である。土日によく売れる傾向にある。冊数では月1000冊程売れる。

Q. お酒の提供はあるか。

A. 周年イベントで出したが、常設では出してはいない。酒に関する要望も特にない。また、正面にお酒屋さんがあるため、エリア分けをしている。

Q. 館内での飲食は禁止か。

A. 表立って禁止はしていないが、さすがに学生がマクドナルド等、においの強いものを持ってくるとNGにしている。読んでからそのまま買うことができる店のため、手を汚したりするような飲食物もNGにしている。判断については善意に任せている。

Q. 指定管理者制度で大変だろうが、スタッフ何人いるのか。

A. 全体で7名。市からは人材を出していない。必要があるときに出張る形をとっている。八戸ブックセンターさんのように優秀なスタッフがいるわけ

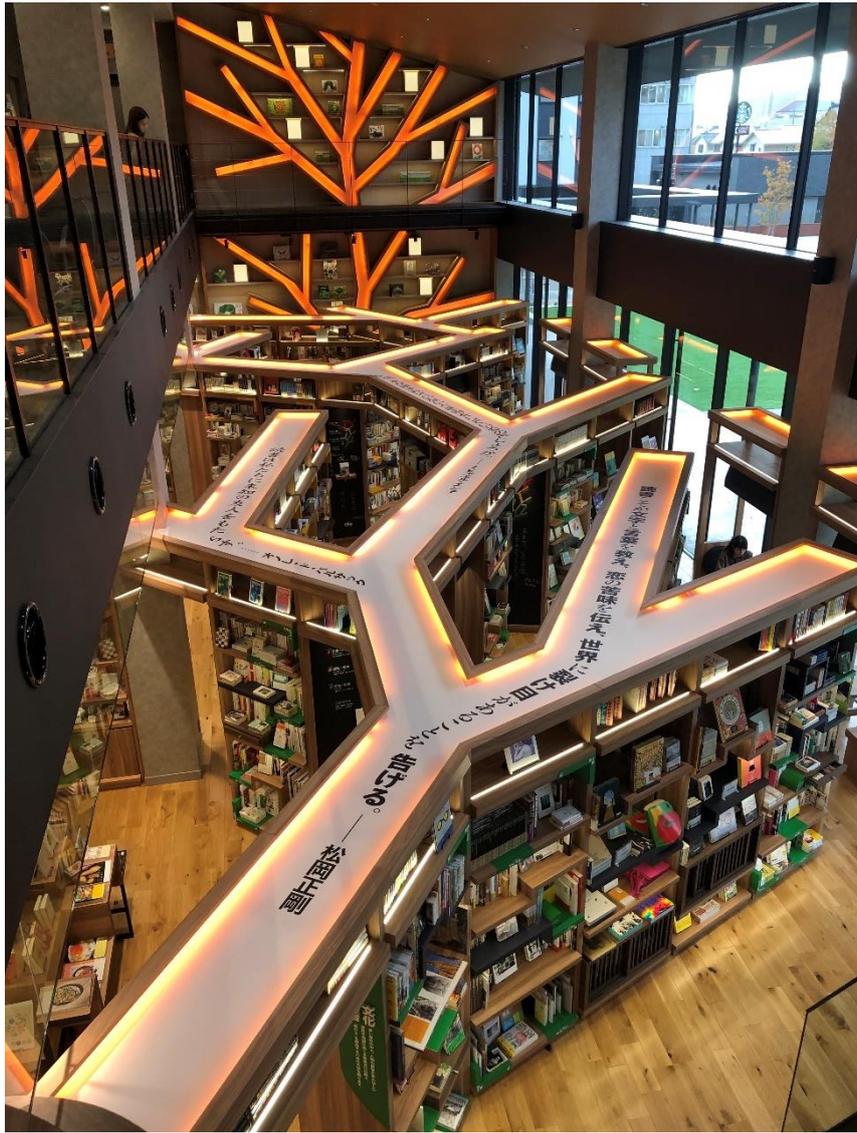
ではないので、指定管理を選んだ。

- Q. 苦労話はあるか。
- A. ある程度のことはあったが、むしろ予定来館者数 10 万人が、3 倍の 30 万人になり、嬉しい悲鳴である。
- Q. 条例で、やりたくてもやれないことへの辛さはあるか。
- A. 事業者が全力で頑張れるように、条例をやりやすいように整備した。
- Q. 指定管理期間は 5 年間か。
- A. 一応、5 年間で設定している。
- Q. 丸善さんは指定管理で、別な地域のモデルを担っているのか。
- A. 香川県善通寺市の子育て支援施設を丸善で請け負っている。とはいえ基本は書店関連である。
- Q. 八戸での失敗を繰り返さなかった秘訣は何か。
- A. ジャンルのすそ野をひろくして、「様々な人に知ってもらう、手に取ってもらうこと」を大切にしている点。棚への並べ方も、点ではなく面で並べるようにしている。きっかけ作りを大切にしている。
- Q. 一連のイベントは、市長が熱心だったのか。
- A. 違う。むしろスタッフがすごかった。中間管理職に情熱がないと、何事も実現しないと思う。トップの肝いりだと下はやらされるだけ。下からだと上につぶされてしまう。中間の仕事が大切だと思う。









4 視察所感

小規模特認校について学び、教育現場を視察できたことには、非常に価値を感じた。複式学級による授業はその最たる例であり、学年の垣根を超えて1つの教室で学ぶことは、八戸で一般的である授業体系とは全く異なるものであった。今回は中学校が試験直前期ということで、小学校のみを視察させて頂いたが、児童たちの、のびのびとした様子を見て取ることができた。さながら「少人数制の学習塾で学校の授業を行っている」ような光景は、塾講師でもある自分の仕事現場に重なる部分さえ感じた。

さて、元々は過疎や少子化から生まれた小規模特認校制度であるが、「学びの多様化」という観点からは、過疎地のみならず、より多くの地域で推奨されてもよいのではないかと感じた。なぜならば、児童・生徒・保護者が少人数制の学校を選ぶ基準は、人口減の他にも、発達障害やひきこもり等々、様々な事情があるからである。実際、東浦小中学校においても、集団生活が苦手な子どもたちが同校を選択しているケースもあるとのことであった。

しかしながら、そこには多くのハードルがあることも事実である。送迎や学校活動への積極参加等、保護者の負担が大きくなることや、複式学級を指導する教員の質や、その人数確保の問題等である。

物事には何かしら長短が存在する。小規模特認校制度もまたしかり、である。とはいえ、今後確実に進んでいくであろう少子化問題や、「ひとりも取り残さない」視点における教育の多様化を考慮すると、八戸市においても、来るべき将来を見据えた調査・研究が必須であると感じた。

これらの気付きを与えて頂き、忌憚のない現場の意見を述べて下さった東浦小中学校の皆様へ、心から感謝申し上げます、本視察の所感としたい。

公設書店「ちえなみき」について、視察を行ったことではっきりとわかったことが1点挙げられる。それは「市民ニーズをしっかりと掴んできた」ことである。「ちえなみき」は構想段階において、学生や主婦、子育て世代や高齢者等、様々な立場の市民から、何度も意見を募ってきた。その結果、「何かに特化した書店」ではなく、「幅広く、書籍へのきっかけを提供する書店」としての方向性を選び、市民に受け入れられたのである。

例えば「ちえなみき」にはマンガ本も置いているが、全て1～3巻程度までしかない。「この本に興味をもったら、あとは近くの書店へ足をお運びください。」という方針なのである。これは非常に優れた手法であると私は感じた。「専門性が高い分野」や「利益の出にくいニッチな分野」を補完するだけが「公」の役割ではないことに気付かされたからである。

どのような事業であっても、顧客がそれに必要性を感じなければ、継続的な運営をすることはできない。しかしながら、公共性のあるものでなければ「公設」での運営もできない。「ちえなみき」は、これらの点を見事にクリアした事業なのである。

八戸ブックセンターも、公共性を踏まえた様々な狙いがあることは承知の上である。とはいえ現状を考慮すると、その方向性が多くの市民ニーズに合致しているかは疑問であると言わざるを得ない。それならば、改めて構想を練り直し、一定の方向転換を図ることが重要ではないだろうか。私は是非とも、八戸ブックセンターには、これまで培ってきた「専門性の高い書籍を扱うノウハウ」を活かしつつ、「老若男女全ての市民に、幅広く本への興味・関心・きっかけを提供する」公設書店としてリニューアルして頂きたいと感じている。

事業計画の見直しには「PDCA サイクル」が用いられるが、まさに今がその時である。「徹底的に市民の意見を集め、ソフト面を改善して提供し、結果を考察し、実行に移す」。この繰り返しを常に実践する事こそが、八戸ブックセンターが「市民と本とをつなぐ拠点」として機能するために必要であると考える。

終わりとなるが、八戸市とは異なった新しい活路を見出し、成功へと導いた事例を示してくださった「ちえなみき」に対し敬意を表し、八戸ブックセンターのこれからの期待することをもって、本視察の所感としたい。